

「笑顔のために」 咲かせる大輪の花

コロナ禍で軒並み中止、縮小されてきた夏祭りや花火大会が、今季は再開の動きが見られる。宮城県北唯一の花火製造業者「若松煙火製造所」の工場にも、久しぶりに慌ただしい夏が到来。連日の酷暑の中、「喜んでもらえる花火を」と作業に精を出している。

「安全でなければ 花火ではない」が信条

「ここ2、3年は夏祭りの休止に伴い花火大会も取りやめに。あっても小規模な打ち上げ程度でした。花火製造も滞っていました。今年も戻りつつあります。今日もこれから石巻で花火の打合せです。こう語るのは、若松煙火製造所の若松將生社長。言葉通り、事務所のホワイトボードは予定でびっしり。多忙なスケジュールの合間に取材に応じてくれた。

同社は明治15（1882）年創業で、若松社長で六代目になる。花火の製造業者は宮城県内に4社あり、

同社は仙台市以北で唯一。地元大崎市のおおさき花火大会をはじめ、石巻川開き祭りや遠野納涼花火まつり、平泉町の世界遺産・中尊寺の文字焼きなど、主に宮城県北、岩手県南の花火大会での打ち上げに携わっている。

花火の競技大会「大曲の花火」にも出場し、優勝もしている。特に若松さんの心に残っているのは、2014年の第88回大会。昼花火の部で「紫煙竜の舞」と名付けた花火が見事優勝した。11年の東日本大震災で工場が損壊し一時休業を強いられる、という苦境を乗り越えての優勝は、まさに「復活ののろし」。社員たちの喜びもひとしおだった。

同社の工場は栗原市高清水にある。もともとは本社がある大崎市古川に設けていたが、周辺に住宅が増えたため移転した。花火作りで同社が最も大切にしているのが、安全性だ。「安全でなければ花火ではない」と若松社長は言い切る。規模拡大や利益を追及するのではなく、無理せず自分たちができる範囲で安全な花火を製造する。「これが先代、先々代からの教えです」。

安全への意識は工場の様子からもうかがえる。広大な敷地の隅々まで整備が行き届き、死角が少ない。雑草もほとんどなく、敷地内にある法面の草も短くきれいに刈られている。「看板を掲げず、遠くからは花



背中に花火模様がデザインされた法被は、打ち上げの際にも着る



完成した花火玉には、花火の名称「玉名」の印を押す。花や色の名前が多い中、異彩を放つのが「カップ」「きゅうり」。河童伝説の遠野市で打ち上げられる



火薬を測るさじは、竹や使用済みののがぎを再利用。「道具がなければ自分で作る」。エコな精神が根付いている

火の工場とは分らない造りも、関係者以外の不意な立ち入りを防ぐためです」と若松社長の妻ひろさんは強調する。

地元大崎の花火大会 復活に思い高まる

花火作りは夏だけでなく、一年を通して行われる。花火玉は光、色彩、煙を発生させる「星」と、文字通り、空中で玉を割る「割り薬」の火薬からなり、製造は、火薬の配合、星を作る「星掛け」、星と割り薬を詰める

「玉込め」、玉込めした花火玉の表面に紙を貼る「玉貼り」に大別できる。取材に訪れた6月下旬は、すでに今季分の配合、星掛けを終え、玉込めと玉貼りの真っ最中。玉込めは、「玉皮」と呼ばれる打ち上げ花火の外殻に火薬を充填する作業。半球体の玉皮の内側にまず星を並べ、その上から割り薬を詰めていく。慎重かつ丁寧に一つ一つの工程が進められる。

隣室では、この道30年のベテラン

職人三浦さんが玉貼りの作業を進める。糊で紙を貼る、天日に干す、乾いたらまた貼る……。この工程を尺玉の場合、4、5回繰り返す。最終的には40〜50層で覆う。この期間、約1カ月。前段階の配合、星掛けを含むと、さらに手間と時間が掛かっていることになる。それがわずかに数十秒で夜空に消えるが、若松社長は、そのはかなさが「いいところ」と微笑む。

8月2日、おおさき花火大会が3年ぶりに有観客で開催される。古里の花火の復活に「地元の皆さんに喜んでもらいたい」と若松社長も気合い十分。ひろさんも「おおさき花火大会は打ち上げ場所と観客が近いのが特徴。臨場感と迫力を楽しんでほしい」と話す。

長引くコロナ禍、物価上昇など何かとうつむきがちな昨今。「花火を見ると自然と上を向くでしょう。顔を上げて明るく元気になってほしい」と若松社長。闇夜を照らす大輪の花に一途な思いを込める。



Photo by K.ONOZATO

若松煙火製造所の代表作「夢桜」。日本を代表する花・桜をイメージした花火で、1998年から毎年進化し続けている



花火玉の表面にクラフト紙を貼る「玉貼り」は、経験が求められる重要な工程



一つ一つ丁寧に作られた花火玉が各地の夏空を華やかに彩る

Information
有限会社 若松煙火製造所
本社 / 大崎市古川前田町7-2
TEL0229-22-0735
工場 / 栗原市高清水



若松煙火製造所社長
若松 將生さん
「安全で感動していただける花火作り」を目指し、家族とともに伝統を守り続けている。日本を代表する花火の技術者集団「一般社団法人日本煙火芸術協会」の理事も務める



星と割り薬を詰める「玉込め」の作業をする若松社長と長女の葉津美さん